

Title	「笑い」と反骨：『大阪球陽新報』にみる石川正通の「沖縄コンプレックス」
Author(s)	仲村, 紗希
Citation	日本学報. 35 p.201-p.210
Issue Date	2016-03-20
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/55504">https://hdl.handle.net/11094/55504</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 「笑い」と反骨 ——『大阪球陽新報』にみる石川正通の「沖縄コンプレックス」——

仲 村 紗 希

### はじめに

本稿では『大阪球陽新報』における記事を中心に、石川正通の「笑い」と「沖縄コンプレックス」の関係性について考察する。『大阪球陽新報』とは、1937（昭和12）年7月25日に大阪球陽新報社によって創刊された機関紙で、おおむね月に2回刊行されていた。主幹は真栄田勝朗、企画・編集を松本三益がつとめ、国家総動員体制が整えられていくなかで阪神地域へ流入した沖縄出身者（「在阪沖縄県人」<sup>1)</sup>）に対し生活改善運動を推奨した。発行部数に関して現段階で断定することはできないが、1938（昭和13）年8月1日発行の第23号のなかで第2号と第10号の残部がないことや、本紙の印刷を委託している印刷所の刊行物の発行部数が倍以上になっていることが報じられているため<sup>2)</sup>、『大阪球陽新報』の発行部数も増加していたことが推測できる。また、専任記者であった山城善光の自伝のなかで<sup>3)</sup>、沖縄をはじめ東京、九州、南洋群島から「賛辞と激励の手紙が舞い込んで来」たとあることから<sup>4)</sup>、『大阪球陽新報』創刊号は、関西に限らず沖縄出身者のコミュニティが形成されていた地域で購読されていたと推測できる。

本稿は『大阪球陽新報』の有力な投稿者であった石川正通の言説分析を通して、彼の「戦前最後の言論の場」であった本紙において「笑い」を通して表現された「沖縄コンプレックス」と反骨の精神について追求することを目的とする。石川正通は、戦前は英語の教員や新聞雑誌等における執筆活動を行ない、戦後は那覇市の名誉市民として顕彰される〔1982（昭和52）年〕など、「沖縄近代（二十世紀）の偉大なる学者石川正通先生<sup>5)</sup>」と評された人物であった。しかし、石川個人に関する先行研究はほとんどなく、彼の没後に出版された『石川正通追想集』が唯一まとめられた文献である。『大阪球陽新報』において石川は「一流のユモア文学を発表して各階級の読者層に映画俳優の如く人気を博している<sup>6)</sup>」寄稿者として、「沖縄語」を用いた「笑い」の記事をよせていた。『石川正通追想集』に収録されている「補遺・追悼の文」のなかで、石川が生前「沖縄コンプレックス」という言葉を公開の場で口にしていたことが述べられている<sup>7)</sup>。ここで石川は「沖縄コンプレックス」を堅持していたからこそ、あえてその言葉を口に、「開き直ったのが反骨の彼で

はなかっただろうか」と想起されている。『大阪球陽新報』における石川の記事から、「笑い」だけでなく生活改善運動への提言から体制批判までを中心とした石川の言説と、回想で（他者によって）語られる石川の「沖縄コンプレックス」から、「余は沖縄人を誇りとする<sup>8)</sup>」のような直接的に表現する「郷土愛」とは異なる、「反骨の郷土愛」について分析する。

## 1. 石川正通略史

### 1-1. 先行研究

『石川正通追想集』に収録されている「故石川正通先生略歴」によると<sup>9)</sup>、石川正通（1897～1982年）は沖縄県那覇市（当時は那覇区）出身。尋常小学校時代から英語を学んでおり、第一中学校時代には中等学校弁論大会において英語の演説を行っていた。第一中学校中退後は上京し私立麻布中学校へ転校、その後英語学校の講師や第三版「全訳・シャーロックホームズ」（越山堂）の出版などにあたっている。『大阪球陽新報』が刊行されていた時期は「日本女子高等学院（現在の昭和女子大学）」の英文科教授を勤めていた。1945（昭和20）年は陸軍省嘱託憲兵司令部通訳官、翌年には極東国際軍事裁判（東京裁判）の翻訳官・通訳官など、語学を活かした活動をしていた。1948（昭和23）年からは順天堂医科大学教授を務める傍ら、ラジオ沖縄で「正通放談」を放送。晩年は国士舘大学の客員教授を務め、1982年5月20日に沖縄県那覇市名誉市民の称号を送られ、顕彰された。

本稿に先立つ研究として知名留衣子「反体制としての〈笑い〉——石川正通を視座として——」が挙げられる<sup>10)</sup>。知名によると、石川は「反骨・野人、富貴にこびず、権力になびかず<sup>11)</sup>」「沖縄を心から愛された先生<sup>12)</sup>」として周囲から回想される人物であり、戦前最後の言論の場であった『大阪球陽新報』には、戦争一色の大衆に対する批判が反映されていたことが考えられると指摘する。知名の論文は『石川正通追想集』を主資料として、社会背景を踏まえ石川の人物像、作品、活動からジョン・フィクス『快樂の抵抗』を援用しながら「反体制としての〈笑い〉」の可能性を指摘する重要な研究であるといえるだろう。知名は『大阪球陽新報』における活動について、生活改善の推進という本紙の趣旨に一応は沿いつつも、「指導者」ではなく読者に〈笑い〉を届ける「ジョーカー」としての「石川正通」を（石川自身が）保持しようとしたのではないだろうか<sup>13)</sup>と述べている。

本稿においては知名の論を踏まえながら、対象を『大阪球陽新報』の記事に絞って分析する。石川に関する周辺情報は『石川正通追想集』を参照する。

### 1-2. 『大阪球陽新報』における記事

石川の記事は『大阪球陽新報』に多く掲載された。また、他の人物の記事との対応記事

「笑い」と反骨（仲村紗希）

など、間接的に関わっているものもある。石川関連記事については以下の通りである。

表1 石川正通関連記事一覧<sup>14)</sup>

日付	号	見出し	備考
1938年7月11日		近衛文麿と石川正通	『石川正通追想集』収録。家庭生活について。第28号「沖縄と婦人問題（大宜味朝徳）」と関連
1938年7月15日		快男児/石川正通君/この英語学者は芝居通でもある	『石川正通追想集』収録。執筆者は真栄田勝朗。石川自身の「沖縄語」使用について等
1938年8月1日	23	郷土の文化促進座談会/在京文化人の郷土に対する熱烈の情	「沖縄の文化水準を引上げる為」の座談会。石川は服装、教育、家庭についてそれぞれ提言
1938年8月15日	24	知事教育	同面「新任知事の腕試し/新任知事の腕試し/辻遊郭の改革厳行/廓内営業者縮み上る」と対応
	24	辻斬り異聞	辻遊郭について
1938年12月1日	30	高嶺明達君を送る	旧友の出世への祝辞。同号「満州国参事官/高嶺明達氏の豊富」と関連
1939年1月1日	31	新春随想/県民再組織	客（大阪から上京した悪友）と石川のかけあい。国民再組織について
1939年2月15日	33	大阪芝居を恋ふ/同好の先輩真栄田主幹に捧ぐ	大阪の琉球芝居を題材にした詩
1939年4月1日	36	その日の漢那次官/我等もセイム次官	真栄田とのかけあい。沖縄最初の次官がでたことから「六十万県民が次官」「我らもセイム次官」
1939年4月15日	37	石川正通氏のユモア見舞状	真栄田勝朗へ宛てた見舞状の紹介
1939年7月20日	42	狂員・狂語・狂想	「血と痔」「知念哲雄の禁酒観」「内海忠司氏の辻観」「私の辻占」「尾類を愛せよ」の4編から成る
	42	喫煙室/伊江男が本紙の発展を激励	石川が伊江男爵からきいた『大阪球陽新報』への激励について、記者がさらに訪問取材したもの
1939年8月1日	43	大阪礼讃/工場の月	「荒城の月」と沖縄の童謡のパロディ
1939年8月20日	44	松方幸次郎と末廣幸次郎/愛県名士の横顔	県出身名士の紹介
1939年9月15日	46	里見発見伝	「里見哲太郎先生足下」ではじまる「先生と茶」「独ソか毒素か」「阿部内閣」の3編
1939年11月1日	49	出征兵士を送る歌	（昭和）14年10月26日付
1940年1月1日	52	物資は食はねど高楊枝	政府と国民生活に対する風刺
	52	石川正通氏にユーモアを聞く会/新春に相応しい集ひ	石川夫妻が大阪を訪れる際に催される座談会の案内
1941年1月1日	71	越年随想/活私奉公	「滅私奉公」のパロディ。「今年もまた熟語氾濫の一年」と評し自身の生活哲学樹立の抱負を語る
1941年1月15日	72	球陽新報に要望す	沖縄県内紙3つが統合し『沖縄新報』が創刊されたことから、『大阪球陽新報』への提言

石川の記事には「沖縄語」が度々用いられていた。その理由について（明確ではないが）大阪球陽新報社主幹の真栄田勝朗が、1938年6月下旬に「本郷区駒込浅嘉町」の石川宅を訪れたときのやりとりが『大阪球陽新報』に掲載された<sup>15)</sup>。

「君は何時も沖縄語を使うか」と聞くと僕はうちの奥さん（彼は然う云つた）とは沖

縄語ばかりだが時には学校でも同県人の学生には沖縄語で怒鳴るとのことである。「それでははたの学生が変に思いはしないか」と聞けば奴等は英語かフランス語とでも思つて平気なものと本人も至て平気である、僕等が他県人の前で沖縄語を喋ると引目を感じずるが外国語の名人は遙かに得だなと感心した<sup>16)</sup>

真栄田が二十歳の頃、石川は「中学の初年級」のときに「那覇メソヂスト教会」で面識があったという。また、「歌舞伎」「芝居」にも精通しているなどの真栄田と接点があり<sup>17)</sup>、真栄田に宛てた「大阪芝居を恋ふ」という詩が『大阪球陽新報』に掲載されている。

二人のやりとりからは「沖縄語」を話すことについて、石川が「外国語の名人」であるからこそ可能だという真栄田の実感が読み取れる。しかし、両者は主な活動地が東京（石川）と大阪（真栄田）と異なっており、在京と在阪の違いについて比嘉春潮がその印象を第23号で「大阪では県人の多数が自分等は沖縄県人だといふことを絶えず意識して、否意識させられつゝ生活してゐるのではないか、といふ印象を受けた。（中略）沖縄県人がどう見られてゐるかといふことは阪神在住の県人にとつては生活上重要な問題であり、多大の関心事であるのは当然で、東京に於ける県人が大体に於て出身県の事を忘れているのとは大いに違ふところがある」と述べている<sup>18)</sup>。比嘉の指摘に即して考えると、石川が「沖縄語」を使用することは「外国語の名人」という個性に留まらない、反転すると「在阪」の生活では実践し得ない言語の問題がここに現れている。

## 2. 『大阪球陽新報』廃刊と石川正通

### 2-1. 新聞統制

1937年7月日中全面戦争が起こった直後に「新聞紙法第二十五条」が施行され、軍事関係の報道は陸海軍大臣にあらかじめ許可を得たもの以外を禁止するという報道規制が敷かれた。内務省警保局によって「時局ニ関スル記事取扱ニ関スル件」という通牒が新聞雑誌等に出され、ジャーナリズムは禁止事項に抵触しないかたちでの報道を行わざるを得なくなった<sup>19)</sup>。こうした統制が敷かれ、戦争へと向かう体制が整えられていくなかで『大阪球陽新報』は創刊された。「沖縄」の一地方紙、「在阪沖縄県人」の一機関紙とはいえ治安当局の検閲対象であったため、大阪球陽新報社の綱領に掲げられているように生活改善運動を推進する、「時局に沿う新聞」として刊行されていた。1939年に新垣美登子のエッセイ「未亡人」を掲載し、それが戦争否定の意を含むと判断されたため発禁処分を受けているが、検閲を通らなかったのは約4年の刊行期間のなかでこの第41号だけである<sup>20)</sup>。

1939年8月に「新聞統制具体案」が出され、地方紙に関して以下のように明記される。

一、地方新聞ハ真ニ「ローカルペーパー」（地方的文化、政治等ヲ代表スル）タル使命ニ徹シク其ノ機能ヲ認ムルコトヲ目標トス。即チ地方新聞ノ数ハ一県二紙ヲ標準トシ、交通文化等ノ地方事情ニ依リ一県一紙乃至四紙程度ヲ認ム整理ノ基準ハ（一）新聞社ノ財政的基礎ノ確ナルモノ（二）自社ニ印刷設備ヲ有スルモノ（三）所謂悪徳不良ナラサルモノトス<sup>21)</sup>

中央有力紙を除いて地方新聞は統合される運びとなり、沖縄県内の新聞も統合される。沖縄県の新聞統合は全国でも宮崎県について二番目に早かった<sup>22)</sup>。沖縄県内の新聞三社が統合されることは、『大阪球陽新報』の中でも報じられた<sup>23)</sup>。そして、『沖縄新報』が創刊されるにあたって、『大阪球陽新報』内でいち早く反応した読者が石川正通であった。

## 2-2. 『大阪球陽新報』への要望

『沖縄新報』が創刊された直後の号にあたる第72号に、石川の「球陽新報に要望す」という記事が掲載された。

事実沖縄三新聞の合同と共に、一躍地位を高め、俄然責任の重くなつたのは我が大阪球陽新報でなければならない。編集者も読者もこの事を徹底的に認識し、誇りやかに自覚すべきである。県内外の母県同胞は良い読み□に飢ゑ、正確な報道機関に飢ゑ高い指導機関に渴して居るのだ。今こそ読者を二倍にし十倍にする千載一遇の好機ではないか。東京支局も設置せよ。皆で守り立て、小新聞としては日本一の優良紙にしようではないか。本紙の向上発展は即ち六十万沖縄県民の向上発展である。超非常時なればこそ、本紙のやうな温い親睦、鞭撻、報道、教養の連絡機関に依つて、読者が一心一体となり、縦に結び、横に連り□□、超非常事を乗切つて、公に□□る力を得る必要があるのだ。本紙は最早我等の精神の糧である。主幹□以て男児の本懐とせずや。<sup>24)</sup>

『大阪球陽新報』における石川の記事は、初期は一般「在阪沖縄県人」に向けられた生活改善に関するものであった。「近衛文麿と石川正通」では生活改善について「沖縄から殆ど人物が出ていないのは、沖縄に家庭というものが殆ど無いからである」と述べ<sup>25)</sup>、この言葉は後の第28号に掲載された「沖縄と婦人問題(大宜味朝徳)」においても紹介される。また、「知事教育」「辻斬り異聞」のように「沖縄語」を交えながら風刺しているものもある（例えば淵上知事の辻遊郭改革について、「良イ知事ヤラー、チヂニカミテ、ヤナ知事ヤラー、ワッターヤカチゾヤルンチ、ウセーリ」「『苟くも紳士が公然遊郭に出入して平気で居るのは世界中に沖縄だけで実に寒心すべき習慣である』といふ淵上知事の——」な



ど）。号を追うごとに、つれ、「物資は食わねど高楊枝<sup>26)</sup>」「越年随想/活私奉公<sup>27)</sup>」にみられるように、「国民の期待と政府の実力がアベ（阿部首相）コベではハタ（畑陸相）の見る眼も可哀想」「近頃の内閣はよく熟語を製造する」など<sup>28)</sup>、「笑い」を入れた体制批判の色が強まる。

石川が「県内外の母県同胞は良い読み□に飢ゑ、正確な報道機関に飢ゑ高い指導機関に渴して居るのだ」と断言しているのは、沖縄三新聞統合が沖縄県民および「在阪沖縄県人」が思想統制の体制へ組み込まれることを危惧したためであろうか。石川は「廃刊」直前（この段階で「廃刊」になることは告知されていない）の号で「温い親睦、鞭撻、報道、教養の連絡機関に依つて、読者が一心一体となり、縦に結び、横に連り□□、超非常時を乗切る力が本紙にあることを、大阪球陽新報社と読者に呼びかけた。

### 3. 「笑い」と「死」の回路

#### 3-1. 「沖縄コンプレックス」

『石川正通追想集』に寄せられた横内圓次「偲び草」の「彼の出身と沖縄コンプレックス」という項で以下の記述がある。

彼はしばしば「沖縄コンプレックス」という言葉を口にし、公開の場、例えば東京の那覇会などでも、これを広言したものだ。た。中略 これを裏返すと「沖縄の人びとよ、誇りを持て！」ということになるのであって、彼はそれを言いたかったのだと思うし、またそれなら本土の人びとにも通用する。この意味で、明治人は皆多かれ少なかれコンプレックスを持っていたのだ。しかしそれはそれとして、彼はこの「沖縄コンプレックス」を堅持していたから、度たび口にしたのであろう。<sup>29)</sup>

ここで横内は石川の出身が「那覇のユカッチュと呼ばれた旧士族」であること、彼の抱える「沖縄コンプレックス」が「明治生れの限られたユカッチュだけにあるのではないだろうか」と述べ、こうした劣等感が（標準語以前の）言語に由来するのではないかということを指摘する<sup>30)</sup>。『大阪球陽新報』に掲載された記事のなかには「沖縄コンプレックス」という言葉は登場しない。横内の「コンプレックスを背負っていた第一人者」であったからこそ石川は「逆手に取って巻き返す」、標準語ではなく「沖縄語」での語りをやめなかったのだろう。

#### 3-2. 「<sup>チムグリ</sup>肝苦しさの笑い」との接続

知名の論にならない石川の〈笑い〉を反体制への抵抗の契機とするならば、沖縄の歴史経

験への抵抗として生活改善運動期に「沖縄語」を積極的に用いた石川の「笑い」と、金城実の戦後という時空間のなかで語られた時間を超えることによる「笑い」への逆転、「肝苦し<sup>チムグリ</sup>さの笑い<sup>31)</sup>」とは一見異なっている。金城実とは、1939年生まれの沖縄県浜比嘉島出身の彫刻家である。「肝苦しさの笑い」について述べている『土の笑い』が出された1983（昭和59）年の著者略歴では、「大阪市住吉区に在住、制作評論活動に専念する」となっている。

石川と金城の「笑い」を「死」という回路でつないだときに、その根源には同質性を見いだすことができるのではないだろうか。金城は以下のように述べる。

死が、土を仲立ちしにして笑いとかけ合うことの意味をどう説明したらおわかりになれるでしょうか。それは、あまりにも肝がなしい話なものですから、せめて涙ぐむことをやめて、「土の笑い」とでも申し上げれば、みなさんにもいくらか納得してもらえるでしょうか。土はいろんな生命をその中にはらみもっていますな。また、生きとし生けるものの悲劇も喜劇も土は知っています。死さえ土は受け入れてくれる偉大なものです。そういう土が大声で笑う、あるいは含み笑いをする、そんな笑いに象徴されるような笑いが、沖縄の笑いだ。私は沖縄の笑いというのは、土の笑いだと思うんですね。<sup>32)</sup>

金城は沖縄のことば（＝「沖縄語」）やその表現土壌が、沖縄が日本に編入されて以降経験してきた差別や抑圧を経て、ようやく「笑い」へと転換することができたという、様々な形態をとって表れる表現として土に例えている<sup>33)</sup>。「肝苦しさの笑い」はことばの「死」、表現の「死」、沖縄と名指され得るものの「死」、あるいは日本軍としての「死」など、多くの「死」を経験しそれを含み込んだものなのではないだろうか。

石川の「笑い」は（『大阪球陽新報』の）同時代の言説として、今「死」に直面しようとしているとき——「死」そのものではなくとも、国家総動員体制下における生活改善運動によって日常から戦場への動員が可能となっている状態——に対して発せられ、外部からの直接的な暴力を回避していた。石川が『大阪球陽新報』で最後に発したのは「笑い」ではなく、「廃刊」を迎える本紙、言論の場の「死」へ向けられた切実な声であったことが事後的に読み取れる。

## おわりに

石川正通の『大阪球陽新報』の記事は生活改善、特に「沖縄の家庭」の問題への言及や「工場の月」のようなパロディ、変わりゆく体制と国民生活に対する風刺など語りは多様



であり、それらは「ユモア文学」という作品として読者に受け入れられた。横内圓次の回想のなかで「沖縄コンプレックス」という言葉が「本土では頗る理解しがたい」ものであったことが述べられており<sup>34)</sup>、（本土の示す範囲をここで明示することはできないが）関西で発行されていた本紙の中では「沖縄コンプレックス」という表現が用いられることはなかった。「沖縄を心から愛され続けた先生」の抱えた「沖縄コンプレックス」を反転させたメッセージとしての語りが本紙に掲載された記事であるならば、それは確かに他の記事と呼応し合っていた。そして本紙の「廃刊」直前に発せられた切実な声は、金城の「肝苦しみの笑い」の意を含みこむものではなかったかという展望を記すことをもって、現段階での分析の結びとしたい。

今回個別の記事を十分に扱うことができなかったため、『大阪球陽新報』における石川の個別の記事を丁寧に読み解き、他の記事と比較しながら、本紙当時の（石川の）反骨の思考と「沖縄コンプレックス」について検討することを今後の課題とする。

## 注

- 1) 『大阪球陽新報』において、沖縄出身者を表す言葉は「沖縄人」「わが県人」などいくつかある。「在阪沖縄県人」と「在京県人」との違いについて、ここでは詳細な議論は控えるが、「沖縄人」「全県民」および「在阪」という呼称は予め対置されている「日本人」によって規定され、様々な外的要因によって「沖縄」が日本の一地方に還元されない、日本である一方で日本ではないという宙吊りの領域であることを示していたのではないだろうか。本稿において、宙吊りにされた領域に存在する「日本人」であろうとしながらも「沖縄」であることを余儀なくされるという矛盾を孕む存在であった、特に阪神地域に移り住んだ沖縄出身者に関して「在阪沖縄県人」という語で表記する。
- 2) 「東京を始め各地に於て本紙を創刊号から続いて綴つてゐる向が多いさうですが若し欠けて居る新聞がありましたら御請求次第至急差上げます。但し第二号と十号は残つて居りません。本号原稿は七月二十八日届けましたが本社の印刷所に於ける定期刊行物が悉く倍以上に増頁したため遅れましたから不悪御諒承を願ひます」（1938年8月1日『大阪球陽新報』第23号8面掲載「読者各位へ」より）。
- 3) 山城善光『続・山原の火 火の葬送曲——一轉向者、赤裸々の軌跡』（沖縄タイムス社、1978年）。
- 4) 前掲『続・山原の火 火の葬送曲——一轉向者、赤裸々の軌跡』22頁。
- 5) 米城律・伊藝滋 編『石川正通追想集』（石川澄子、1985年）92頁。
- 6) 1940年1月1日『大阪球陽新報』第52号「石川正通氏にユーモアを聞く会/新春に相応しい集ひ」より引用。
- 7) 前掲『石川正通追想集』341頁。
- 8) 1940年2月1日『大阪球陽新報』第54号掲載「余は沖縄人を誇りとする（南風原朝保）」。  
他にも「県の発展策を名士に聞く/堂々と沖縄人たるを名乗れ」（1940年1月1日第52号）や「ナ

イチャー奇譚」（1941年1月1日）、「新体制は新道徳に非ず/沖縄人の美風」（1941年2月10日第73号）などが挙げられる。また、「郷土趣味講座（金城朝永）」の連載など郷土研究の記事も多く掲載されている。個別の記事内容について本稿の目的とずれるため今回は扱わないが、「在阪沖縄県人」が「日本人」に同化する方法を探りながら「沖縄人」として愛郷心やアイデンティティを保持した「曖昧さ」についての指摘は仲間恵子「日中戦争期の在阪沖縄人」（『大阪人権博物館紀要』第5号、2001年、41-76頁）に詳しい。

- 9) 前掲『石川正通追想集』27頁より。
- 10) 知名留衣子「反体制としての〈笑い〉——石川正通を視座として——」（琉球大学法文学部国際言語文化学科日本東洋文化専攻2010年度卒業論文）頁数は所収されている『2010年度大胡研卒論集』に従う。
- 11) 前掲『石川正通追想集』34頁。
- 12) 前掲『石川正通追想集』49頁。
- 13) 前掲「反体制としての〈笑い〉——石川正通を視座として——」408-409頁。以下、知名の論に沿って石川の笑いについて記述する際には〈笑い〉と表記する。
- 14) 筆者の作成した『大阪球陽新報』記事目録（と前掲『石川正通追想集』321-333頁、前掲「反体制としての〈笑い〉——石川正通を視座として——」407頁を参照し作成。『石川正通追想集』の「補遺・石川正通の足跡」に『大阪球陽新報』より転載」とあるため、現存している記事については日付と号数を照合し記載した。また、『大阪球陽新報』から石川の発言や関連する記事も含めた。
- 15) 前掲『石川正通追想集』に「昭和十三年七月十五日」付けの原稿として掲載されているが、先述した通り『大阪球陽新報』に該当する号が確認できないため、原文にあたることはできなかった。
- 16) 前掲『石川正通追想集』322頁「快男児/石川正通君の印象/この英語学者は芝居通でもある（真栄田勝朗）」より。
- 17) 石川は東北帝国大学法文学部国文学科卒業で、卒論のテーマは近松門左衛門の「世話浄瑠璃について」（前掲『石川正通追想集』27頁、「故石川正通先生略歴」より）。また、「段々話して行く中に君が芝居にも通暁している事を知った」「内外の劇に関する書物が書斎の約半分の面積を占めて千部程有る」（同上）、「歌舞伎にも精通の石川さん」（前掲『石川正通追想集』85-86頁）など。
- 18) 1938年8月1日『大阪球陽新報』第23号「在阪県人の悩み/在京人との相違点（比嘉春潮）」。
- 19) 高崎隆治『戦時下のジャーナリズム』（新日本出版社、1987年）33頁。
- 20) 新垣の「未亡人」と発禁処分については別稿に改める。
- 21) 内川芳美編『現代史史料41 マス・メディア統制2』（みすず書房、1975年）272頁。
- 22) 沖縄県教育委員会 編『沖縄県史 第5巻各論編4 文化上』（沖縄県教育委員会、1975年）514頁（初出は高嶺朝光『新聞五十年』224頁）。
- 23) 1940年11月1日第68号3面「沖縄の三新聞年内には合併か/目下県当局が首脳部の各社振割に折衝中」、1941年1月1日第71号2面「沖縄新報の陣容/幹部社員確定」。関連するものとしては1940年8月5日『大阪球陽新報』第63号2面「那覇支局設置」や1940年11月1日第68号1面「本社の陣容強化/向後益々内容を充実文章報国に邁進せん」など。

## 「笑い」と反骨（仲村紗希）

- 24) 1941年1月15日『大阪球陽新報』第72号1面「球陽新報に要望す（石川正通）」。（旧漢字は新漢字に改め、仮名遣いはそのまま表記している。また、判読不能な文字は□で表している。以下同じ）。
- 25) 前掲『石川正通追想集』321頁より引用。
- 26) 1940年1月1日『大阪球陽新報』第52号6面掲載。
- 27) 1941年1月1日『大阪球陽新報』第71号5面掲載。
- 28) 引用はそれぞれ「物資は食はねど高楊枝」「越年随想/活私奉公」の記事から本文の通り記載。
- 29) 前掲『石川正通追想集』341頁。
- 30) 同上。
- 31) 金城実『土の笑い——オキナワへ、オキナワから——』（筑摩書房、1983年）35頁。
- 32) 前掲『土の笑い——オキナワへ、オキナワから——』37頁。
- 33) 前掲『土の笑い——オキナワへ、オキナワから——』35頁。
- 34) 前掲『石川正通追想集』341頁。

## 参考文献

### 史料

大阪球陽新報社『大阪球陽新報』（1937年7月25日—1941年2月10日、全73号）  
眞榮田之琛 編『球陽』（大阪球陽新報社、1938年）

### 文献

内川芳美 編『現代史史料41 マス・メディア統制2』（みすず書房、1975年）  
沖縄県教育委員会 編『沖縄県史 第5巻各論編4 文化上』（沖縄県教育委員会、1975年）  
金城実『土の笑い——オキナワへ、オキナワから——』（筑摩書房、1983年）  
高崎隆治『戦時下のジャーナリズム』（新日本出版社、1987年）  
山城善光『続・山原の火 火の葬送曲——一轉向者、赤裸々の軌跡』（沖縄タイムス社、1978年）  
米城律・伊藝滋 編『石川正通追想集』（石川澄子、1985年）

### 論文

知名留衣子「反体制としての<笑い>——石川正通を視座として——」（琉球大学法文学部国際言語文化学科日本東洋文化専攻2010年度卒業論文）  
仲間恵子「日中戦争期の在阪沖縄人」（『大阪人権博物館紀要』第5号、2001年）41-76頁

（なかむら さき 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）